

Pre-News Letter

No. 5

18年 6月 6日 (火) 発信

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するときーユーラシア農耕史と環境ー
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤研究室 (大島) e-mail:mihosma@chikyu.ac.jp

〒603-8047 北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



京都はそろそろ川床の季節です。清涼感のある鞍馬も近い地球研となりました。

この画像は<http://www.e-kyoto.net/> からいただきました。

『自然を侵すことで成り立つ“生”について考える

ー “焼畑” と “人柱” から見る東北の精神風土ー』

六車 由実 (東北文化研究センター)

自然を侵すことで成り立つ“生”について考える

— “焼畑” と “人柱” から見る東北の精神風土 —

地球規模での環境問題への取り組みが切迫した課題となっている現在において、私たちは、これからどのように自然と向き合って生きていけばいいのか。そのさまざまな可能性を考えるための手がかりとして、たとえば、私は、東北の地で今でも継承されている“焼畑”という伝統農法や、また人々の間でリアルに語り継がれてきた“人柱伝承”という犠牲の物語に注目し、そこに見られる人々の自然との関わり方とそれを支える精神風土について研究している。

私の住む山形には、かつて全国的に行われてきた焼畑が今でもいくつかの地域で細々とながら続けられている。一面では火を使って暴力的に自然を侵す焼畑は、これまで森を破



壊する粗野な農耕として環境保護の観点からは槍玉に挙げられてきた。しかし、実際に行われてきた伝統的な焼畑の方法やそれに関わる信仰を注意深く見てみると、そこには、人間の限りない欲望を抑制し、自然のリズムに合

わせて森を再生させようとする工夫が幾重にもなされていることがわかる。現在もなお焼畑を続けているということは、単なる農業技術の継承にとどまらず、そうした自己抑制の利いた自然への対し方あるいは作法を保ち続けていることでもあるのだ。

また、一方、東北地方のいくつかの河川には、人柱の伝承とそれにまつわる祭りが伝えられている。たとえば、青森県藤崎町を流れる浅瀬石川では、慶長14年の堰の普請のときに、堰八太郎左衛門という堰守が自ら川底に横たわりその腹に杭を突き刺して人柱となって、難工事を成就させたという伝説が祭ともに伝えられている。川は、昔から神の領域だと見なされてきた。だから、そうした神の領域に、橋や堰などの人工物を作ることは、神（自然）への侵犯を意味したのである。したがって、人柱伝説は、そうした自然への侵し



に対する贖罪の観念を表現した物語だとも見てとれる。いずれにせよ、かつて人柱を立てたという村の負の記憶をリアルに伝え続けていることの意味は、東北の精神風土を考えるうえで見逃せない。

こうしてみると、焼畑と人柱といった一見すると無関係な民俗事象が、共通した思想に支えられていること

がわかってくる。それは、自然を侵すことで自分たちの生が成り立っているということへの自覚である。私たちは、とかく自然と人との関係について述べる時、「自然との共生」や「自然に優しい」といった言葉を使いがちだ。しかし、実際には、人は自然を侵し、自然を利用して生きていくほかはない。むしろ、私たちは、生きるということは何ものかの犠牲のうえに初めて成り立つものであり、また自分もその犠牲になりうるのだということに、いかに自覚的になれるのかが重要なのである。焼畑や人柱伝説には、そうした、いわば「自然のなかで生きるための掟」が脈々と受け継がれているといえよう。